

学習する楽しさを実感し、学び合い、深め合う指導過程の工夫
～国語科における対話のある授業づくりを通して～

塩竈市立玉川中学校

教諭 小林 美佐子

1 主題設定の理由

1. 1 今日的な課題から

生徒たちに求められている力は、変化の激しい社会の中で柔軟に対応し、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」をはぐくむことである。

次期学習指導要領では、各教科で「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を促すとしている。そして、学びの本質として重要となる「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業改善の視点が「アクティブ・ラーニング」の視点であり、これは、学校における質の高い学びを実現し、子どもたちが学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたってアクティブに学び続けるようにするためのもの（H28・8・1中央教育審議会のまとめ（素案））とある。

1. 2 学校教育目標から

本校では、昨年度からの3年間継続研究として、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業の工夫を通して生徒たちが学ぶ楽しさを実感し、学ぶ意欲を引き出す授業づくりについて研究してきた。そして、課題として生徒同士が学び合い、深め合うなど、広がりのある学習の展開が求められていることを確認した。

その課題を達成するために、対話のある授業づくりを通して深い学びをねらって育てる指導過程の工夫を校内研究で取り上げ

ることとした。さらに、国語科としては、「自分の考えを持ち、対話を通して豊かに表現させるための指導法の工夫」というテーマを設定し、指導上の努力事項として「表現する場（自分の考えをまとめる場・他とかかわり合う場）の設定」を通してそのねらいを明確にしたいと考えた。

1. 3 生徒の実践から

これまで学び合い、深め合う指導過程の工夫として、国語科では4人グループでの話し合い活動などの場面を多く取り入れてきた。「司会・記録・発表」などの係・役割を決めて取り組んでみたが、なかなか学び合い、深め合う場にはならないことが多かった。そんな時に牛久市の視察で「学びの共同体」の実践に取り組んでいる小・中学校の授業を参観させていただいた。グループ学習は「話し合う」ことが大切なのではなくその中で自然と学び合う関係が構築されることが大切だと教えられた。活発に意見交換が行われることが良い授業であると考えていた、これまでの自分の概念が大きく変わるきっかけとなった。

2 研究の目標

学習する楽しさを実感し、学び合い、深め合う生徒を育成するための指導過程の工夫について、対話のある授業づくりを通して明らかにする。

3 研究仮説

対話のある授業づくりを通して、以下の手立てを講じて指導過程を工夫すれば、生

徒一人一人が学習する楽しさを実感することができ、学び合い、深め合うことのできる指導過程を目指すことができるであろう。

手立て

- | |
|---|
| <p>(1) 男女たすきがけ4人グループや一斉授業におけるコの字型などの学習形態の効果的な活用</p> <p>(2) 導入やまとめに「ジャンプ課題」を取り入れることで、全ての生徒に「分からなさ」の共有場面を作る指導過程の工夫</p> <p>(3) 生徒同士で、課題のまとめや説明を行うことで、互いの意見をしっかりと聴き合う関係を作る場面の設定</p> |
|---|

4 研究計画

4.1 研究対象

玉川中学校第2学年 131名

4.2 研究計画

研究主題の設定	: 4月
実態調査	: 5月
研究実践	: 5月～1月
研究のまとめ	: 1月

5 研究の概要

5.1 主題及び副題について

5.1.1 学び合い、深め合う

学び合い、深め合う生徒とは、自分の既習の知識・技能を活用して、様々な課題に取り組み、解決するために、時には個人で、時には他と協力しながら、学習する生徒と捉えた。

5.1.2 対話のある授業づくり

対話のある授業づくりとは、生徒同士・生徒と教師・生徒と教材など様々なものを通して、驚きや発見のある指導過程の工夫

と捉えた。

5.2 実態調査

5.2.1 調査のねらい

本校では年に2回の「学習意識アンケート」を実施している。全国学力・学習状況調査のアンケート内容を参考にして、校内研究の「対話のある授業づくり」に関連する項目を10問程度に絞って調査を行っている。生徒がどのような意識を持って授業に取り組んでいるのかを調査し、全職員でその結果を共有することがねらいである。

5.2.2 調査の方法

アンケートの実施時期は5月と11月の年2回である。全校同じ時間を設定して、担任がアンケートについて説明して、実施している。

5.2.3 実態調査

「学習の課題・目的が分かって取り組んでいる。」という設問に対して、2学年は「よく当てはまる」が30パーセントを切っており、1・3年生と比べても低い値であった。また「友だちの意見を参考にして自分の考えを深めたり、広げたりしようとしている。」という設問に対しても「よく当てはまる」と答えた生徒が30パーセント以下であった。

さらに、全ての教科で、テストの答案用紙になるべく空欄を作らないように指導しているが、「書こうと努力している。」生徒は「よく当てはまる」「まあまあ当てはまる」を合わせても70%程度であった。

以上のことから、学習の楽しさを実感し、学び合い、深め合う指導過程の工夫ができれば、これらの項目にも変化が見られるのではないかと考えた。

5. 3 授業実践

(1) 授業形態の工夫

①男女たすきがけの4人グループ学習

ジャンプ課題に取り組む時は常に4人グループになって活動した。「4人グループになって、個人で課題に取り組みなさい。分からないときはグループの中で相談してもいい。」と指示を出して課題に取り組ませた。



課題の難易度にもよるが、始めは課題の確認を行ったり、やり方について相談する班が多かったが、しばらくするとどの班もほとんど会話をしないで、個人で課題に向き合う様子が見られた。さらに4人グループでの学習を積み重ねたところ、グループになってもまったく話さないで黙々と課題に向き合う生徒の割合が増えた。下位群の生徒も、グループ内の友だちのノートを参考にしながら自分なりに考えをまとめようとする事ができた。

②コの字型で行う一斉授業

本時の授業で何を学ぶのか、学習課題の確認を行うときにコの字型での一斉授業を取り入れた。コの字型は隣や前後の生徒との距離が近いことが特徴である。そのため、分からないことをすぐに周りの生徒に聞くことができ、周りの生徒のつぶやきや発見を共有しやすいなどのメリットがあった。

さらに授業のまとめの場面課題に対してどんな意見を持ったのか発表する時にもコの字型を取り入れた。発表者が後ろを振り返ったり、発表する方向を迷うことなくその場で発表することができるようになった。ほとんどの生徒が、ほんの少し顔を動かす程度で、発表者の表情を見ながら発表を聞くことが可能になった。

この学習形態にしてから、授業の中でのつぶやきや発言はかなり増えた。そして、発表者の顔がよく見えるため、生徒同士の意見の交換も増えた。

(2) ジャンプ課題

「ジャンプ課題」とは、どのレベルの児童生徒にとっても考えないと分からないレベルの課題を指し、授業の前半を「共有課題」後半を「ジャンプ課題」で構成することが望ましいと言われている。

国語科ではジャンプ課題を取り入れることは難しいといわれているが、教材の導入やまとめの場面で取り入れている。

①枕草子・徒然草（導入）

平安時代に生きてると仮定して、友だちと待ち合わせるにはどうすればいいか。

平安時代の人々の暮らしについて想像させることをねらいとした発問である。「太陽の角度」や「空の色」などのつぶやきから平安時代に「朝」という時間帯を表す言

葉がどれくらいあったのか集めさせた。さらにそれを時間ごとに並び替えたり、イラストを合わせて考えさせた。

この活動を通し、平安時代の人々が、いかに自然の変化に敏感であったかということについて確認してから教科書の内容に入った。

「時間」という視点をもって「枕草子」の学習に取り組むことができたので「枕草子」の第一段が季節の好きなどころではなく、その時間帯であると気づく生徒がかなり多かった。

② 走れメロス (まとめ)

小説「走れメロス」にはどんな工夫や魅力があるか。

「走れメロス」を5時間で学習し、単元のまとめとして、作品の魅力について考えさせるため、シラーの「人質」という詩と小説「走れメロス」の後半部分の読み比べを行った。原作の詩と異なる設定や書き足された多くの場面を見つけることで、小説として「走れメロス」の魅力や面白さに気づかせることをねらいとした課題である。

「メロスの長い心臓の音がある。」「一度本気で走るのを諦めた。」「血を吹き出しながら走っている。」「夕日の沈んでいく様子が細かい。」「刑場に王がいる。」「マントを渡す少女がいる。」などの違いから、メロスがより人間味あふれた存在として描かれていること、本当に間に合うか間に合わないかの瀬戸際が描かれていることなどを捉えることができた。

さらには詩の中では使い分けられていない「笑い」の表現に注目して、作品の面白さや作者の意図について読み取ることができた生徒もいた。

③ 坊っちゃん (導入)

小説の題名を「坊っちゃん」にしたのはなぜか。

前時まで取り組んでいた「いきいきと描き出そう」で小説を書くことに取り組んだ。その自分が書いた小説にまず題名を付けてみようという課題から始めた。そして、どんなことに注意して自分が題名を付けたのかを振り返らせて、「坊っちゃん」という題名を付けた作者の気持ちを予想させた。

主人公が「坊っちゃん」と呼ばれていたからという意見が一番多かったが、その他に主人公の性格が「お坊っちゃん」だったからという意見や将来出世して、本当に坊っちゃんになったからという意見も上がった。そして、母親がなくなった後、主人公を育てたのは清で、主人公にとって一番大切な人＝清にとって「坊っちゃん」だからという意見も上がった。

一番多かった「坊っちゃん」と呼ばれていたとあるが、誰からそう呼ばれていたのかを登場人物との関係を確認しながら読み取り、最後にまた同じ課題で学習のまとめを行った。

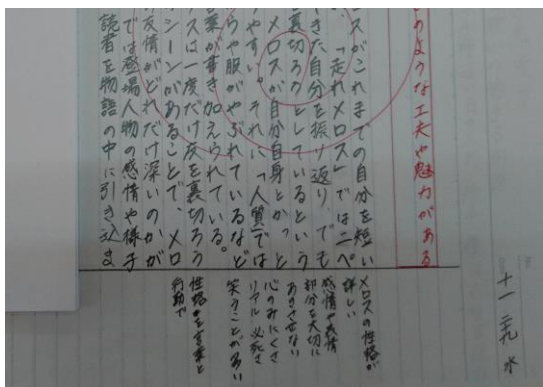
(3) 聴き手を育てる指導

課題に対して、いろいろな考え方を共有することが国語の特質であると考えられる。授業の中では多くの生徒に発表をさせるために、①いちいち発表内容を板書しない。②生徒の発表を繰り返さない。③必ずメモを取りながら発表を聞くように指示することを心掛けた。

板書や繰り返しを丁寧にやっていると、聴き手である生徒が、後で教師がまとめてくれるだろうと思って発表者の言葉を聞き流してしまいがちになる。

発表者の言葉をしっかりと受けとめさせるために、特にメモを取る習慣を付けさせ

ることを意識した。発表の内容を別の生徒にもう一度説明させたり、どんなメモを取ったのか、メモの内容を発表させたりした。そうすることで、生徒同士の聴き合う関係を作り上げることができるようになった。また、メモの内容を発表させることで、メモの取り方や、キーワードのとらえ方についても学び合うことができた。



下の部分にメモ欄を共通でとらせている。

6 研究の成果と今後の課題

6.1 研究の成果

(1) 学習形態の工夫

コの字型や4人グループでの学習形態の工夫を取り入れたことは、何よりも下位群の生徒に対しては効果的であった。これまで、なかなか課題に対する自分の考えをノートに書き始めることができなかつた生徒も、隣やグループの生徒のノートを見たり、教えてもらったりしながら自分なりに書き始めることができるようになった。

何よりも一番の成果として、個別の配慮が必要な生徒が、コの字型の授業形態になるとしっかりと列の中に机を並べることができた。普段は、何度も声掛けしたり個別に指導が必要であったりしたが、コの字型にしてからは一度も授業からの離脱がなかった。

(2) ジャンプ課題

ジャンプ課題を取り入れることで、それ

ほど国語が得意でない生徒のつぶやきや発表で、教室内に「なるほど」という共感が広がる場面が何度も見られた。「走れメロス」では、「“笑う”という動作にもいろいろな笑いを表現する言葉がある。」という発言に多くの生徒が改めて共感していた。

(3) 聴き合う関係

生徒の発表場面の設定を通して、相手は何を言っているのか聴き取ろう、理解しようとする意識が感じられた。そして、発表する側にも分かりやすく伝えようとする変化が見られた。もう一度発表をして下さいと指示すると、聴き手を見ながら発表しようとする生徒が増え、自然と声の大きさや、話すスピードを変える生徒が増えたことも大きな効果であった。

何よりも効果があったのは、聞き逃してはいけないという緊張感がしっかりと高まったことである。

6.2 今後の課題

(1) 学習形態の工夫

コの字型の学習形態に取り組んで、一番大変だったのは机間支援が狭くてやりづらいことであった。なるべく多くの意見や考えを拾って発表し、教室で共有したいと思っているが、どうしても見づらい場所ができてしまうことがあった。ノートを借りて内容を確認したりすることも可能だが、生徒が書いている途中であったりすると思考を途切れさせてしまうデメリットもあるので、今後の課題である。

(2) ジャンプ課題

ジャンプ課題については、どのくらいのレベルの課題を、どのタイミングで生徒に提示するかという点について、これからも研究が必要であると考えます。

特に国語科の場合、自分の意見を書くという作業にもまだまだ個人差がある。暇な生徒を作らないように、クラスの全員が解き終わっていなくても次の課題を与えていくことが大切であると言われているが、もう少し時間があれば、と考えるとそのタイミングを読むことがかなり難しいと考える。

(3) 聴き手を育てる指導

コの字型での発表は、生徒同士の顔が見える状態で行うことができるというメリットがある。しかし、メモを取りながらとなると「メモを取る」という行為が、一番の目的になってしまい、内容について自分なりの考えを持つことがおろそかになってしまう様子が見られた。メモを取りながら発表を聞く場面と、発表に対して自分の考えを持つ場面とを授業の中で使い分けていくことがこれからの課題であると考えられる。

7 まとめ

7.1 学習後のアンケートの結果から

11月に実施した「学習意識アンケート」では、「学習の課題・目標が分かっている」「友だちの意見を参考にしている」「自分の考えを深めたり、広げたりしようとしている。」に対して「よく当てはまる」と答えた生徒がどちらも40パーセントを超え、「まあまあ当てはまる」という肯定的な意見を合わせて、80%を超えた。

さらに、「自分の考えや思いを文章で書くときに記入欄にいっぱい最後まで書こうとしている。」という設問に対しても、「よく当てはまる」が40パーセントを超え、「まあまあ当てはまる」という意見と合わせると80パーセントを超え、他学年に比べても大きな伸びを見せた。

このアンケートは全教科に対するものであるため、国語科の取組の結果ということ

にはならないが、生徒が学習に対して少しでも前向きに取り組もうという姿勢につながったのは、仲間と一緒に「学び合い」「深め合っている」という意識が2学年の中に少しずつ形成されてきたからなのではないかと考えた。

7.2 実践を通して

これまでは個人の力を伸ばすために、始めは一人で課題に取り組む時間を授業の中に確保し、次に、グループやペアなどでの学習に移行することが多かったが、始めのその一人で学習する時間が、生徒にとっては「不安」や「孤独」な時間であったことが分かった。安心して学ぶ環境を作り上げることが、学習する楽しさを実感することにつながり、そこから、「学び合い」「深め合い」という段階へとつながっているのだと感じた。また、教師一人で全ての生徒の支援にあたることはかなり難しいことであるが、そこに生徒同士の「学び合い」「深め合い」があれば、お互いに大きな成長が望めるのではないかとこの可能性に気づかされた。